

SNE-T

筑波大学附属学校教育局 特別支援教育連携推進グループ

№09
2020.12



巻頭インタビュー伊藤僚幸（附属聴覚特別支援学校校長）

「自分が面白いと思うことなしには、子どもには伝わらない」

- 第1回筑波大学教材・指導法コンテスト（木村賞）報告
- 附属学校実践紹介
- 5 附属連絡会議報告／ほか



巻頭インタビュー：伊藤僚幸（附属聴覚特別支援学校校長）

自分が面白いと思うことなしには、子どもには伝わらない。

新たなデジタル版冊子としてスタートを迎えた SNE-T。

その記念として、今回は同じように今年度新たなスタートを切った附属聴覚特別支援学校校長の伊藤僚幸先生にお話をうかがいました。

先生は、今年度4月から附属聴覚特別支援学校の校長先生としてお務めになっていますね。

令和2年4月から校長を務めていますが、校長となつてすぐの仕事として、新型コロナウイルス感染症への対応がありました。感染症の件はまだまだ落ち着きませんが、各ご家庭や関係の皆様方のご支援をいただきながら今日に至っています。

先生のこれまでのご経歴を教えてください。

私は大学卒業後青森聾学校に勤めていました。平成3年に筑波大学附属聾学校の中学部に着任しました。中学部や高等部で社会科を受け持ち、中学部では女子バレー部の顧問も務めました。平成24年度から昨年度までは副校長を務め、筑波での生活は今年で30年目となります。あつという間の30年だったと感じています。

これまでの実践の中で、先生はどういったことを大切にされてこられたのでしょうか。

授業でこだわってきたことは、授業で扱う場所や物に直に触れるということです。その場の空気を直に感じるということです。甲府盆地のブドウ栽培を扱うときは、現地に行って農家の方にインタビューしたり、戦国時代を扱うときは城の写真を撮ってきたり、遺跡へ赴き土器を拾ってきたこともありました。自分が面白いと思うことなしには、子どもには伝わらない、と考えているからです。

附属聴覚特別支援学校のことについてお聞かせください。

本校が建つこのあたりは、千葉県市川市国府台こうのだいという古くからの文教地区です。学校や研究施設などが集まっている地域で、3年前にはこれらの機関相互の連携を図り、安心安全なまちづくりなどに資する目的で「国府台コンソーシアム」が設立されました。本校もその一員です。

本校の子ども達についてですが、聴覚障害の

程度が重度の子どもが多く在籍しています。ただ、補聴機器の性能は昔に比べて格段に上がりました。今は0歳から聴覚スクリーニング検査の普及により早くに診断を受け、幼い頃から人工内耳を装着するお子さんも増えてきています。現在、幼稚部から高等部専攻科において人工内耳を装着している子どもの割合は約4割にのぼっています。この傾向はこれからもっと進むと予想しています。一方で、手話に対する社会的な理解も広まってきており、本校の中高等部の生徒は、手話、聴覚、文字等々を相互補完する形で情報をキャッチしています。私が教師となった昭和の頃とは隔世の感があります。技術の進歩や障害に対する理解は、聴覚障害児者には大きな福音となっているのではないのでしょうか。また、学校行事などで卒業生が顔を見せにきてくれることがあります。社会で力強く生活している様子を目の当たりにすることは、教師冥利に尽きますね。

それからもうひとつ。応援して下さる支援者が

大勢いらっしゃることも、これも私たちの自慢です。頂いたご支援は、子どもたちの教育環境や教員研修などに役立てております。大変ありがたく思っております。

特別支援教育連携推進グループに対して、一言お願いします。

平成16年に特別支援教育研究センターが立ち上がった時に初代のセンター長を務められたのが、本校の校長でもあった齋藤佐和先生でした。我々附属聴覚特別支援学校の教員も、そのセンターに対する期待や思い入れが大きかったことを思い出します。その後様々な変遷があり、平成30年に現在の特別支援教育連携推進グループへと組織替えが行われました。障害の領域を超えた教育的ニーズはたくさんあるだろうと思います。大学の障害科学域の先生方に指導をいただきながら、

特別支援教育全体の底上げにつながるよう、シンクタンク的な役割を担ってみたいですね。グループに所属する5人の先生方が様々な教育的ニーズを捉え、有益な情報などを教育現場にどのように落とし込んでいくか、具体化していくか。当グループにはできることはまだまだあるように感じています。今後の活動に、大いに期待しています。

* * * * *

インタビューを終えて

頭の片隅には我知らずいつも聴覚障害教育があるとおっしゃる伊藤先生。そして、そんなご自身の視野を広げようと、毎年必ず時間を作っては他の障害種の研修会にも足を運ばれているそうです。自分自身を見つめるその姿勢からも、私たちが学ぶべきことは大いにあったと感じました。

（聞き手：山縣浅日／敬称略）



筑波大学附属聴覚特別支援学校校長 伊藤僚幸先生

第1回筑波大学教材・指導法コンテスト(木村賞) 報告

特別支援教育連携推進グループは、特別支援教育研究センターの流れを受け継ぎ、附属特別支援5校、人間系障害科学域と連携し、教材・指導法データベースの構築・運用を行っています。このデータベースは、広く外部へも公開しており、特別支援教育における教材・指導法の充実と普及に取り組んでいます。これまでも、附属特別支援学校から420点を超える教材教具が寄せられ、日本国内はもとより、海外からのアクセスもあり、広く活用されてきています。

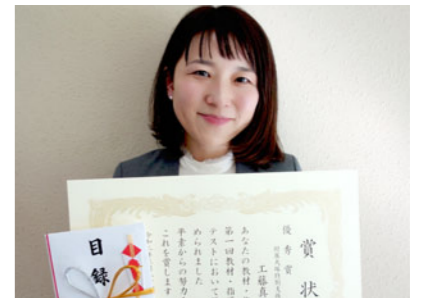
このデータベース事業をさらに充実していくために、昨年度『教材・指導法コンテスト』を開催しました。審査には大学の障害科学域の先生方、附属学校教育局の先生方、5附属連絡会議の先生方と連携推進グループの教員により、1次～3次までの厳正な審査の結果、以下の3作品が優秀作品として選ばれましたので、ここにご報告させていただきます。



優秀賞

「知的障害児・者のわかりやすさに着目したサイン(表示)デザイン」
附属大塚特別支援学校：工藤真生教諭

附属学校教員の専門性の高さを子どもたちの学びや生活に還元していった教材・指導法として高く評価されました。現在、工藤先生が実践された表示デザインは、附属大塚の校内案内図に使用されています。工藤先生は今年度四月より九州大学芸術工学部で、助教としてご活躍されています。「福岡県内の新設される特別支援学校のサイン計画を含めた環境デザインに関わったり、2022年に行われる世界水泳福岡大会の会場表示デザインを学生と一緒に取り組んだりする予定です。」

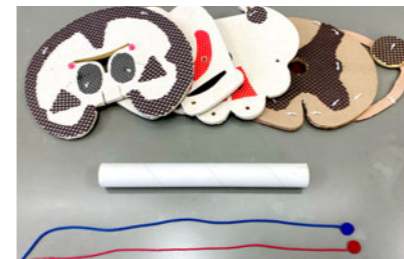


最優秀賞 (木村賞)

「くねくねマラカスフォーマット」
附属大塚特別支援学校：若井広太郎教諭 (幼稚部代表)

身近な素材を使い手軽に作れる点や教材を活かすための楽曲までを含めた「フォーマット」としての指導法、他障害への汎用性の高さ等の点が高く評価されての受賞となりました。「(受賞の知らせを聞いて)大変驚きました。たくさんの教材の中から選んでいただいたことを光栄に思います。教材というものは子どもとともにあり、(子どもに合わせて改良・発展してきた)教材を評価していただけて嬉しいです。」

現在、附属大塚幼稚部では、オンライン授業などで用いる映像教材作りにも力を入れているそうです。



優秀賞

「伝導路」
附属視覚特別支援学校：岸本有紀教諭

本教材で工夫された点は「視覚に障害があっても内容を確認しやすいよう、色合いや触感の違う素材を使用することや、それぞれのパーツを取り外し、生徒が手元でじっくりと確認できるようにしたこと、また、複雑な脳の構造を必要最低限の部位のみ表すことで、重要な部位を強調したことです。」とお話いただきました。



「理療という分野の教材で、しかも神経の伝導路というマニアックな教材が評価されたことに驚きましたが、学習内容を知らない方々にも分かりやすいと評価していただけたことが嬉しいです。ありがとうございました。」

* * * * *

現在も教材・指導法データベースでは新規教材・指導法を募集しております。附属学校で開発された様々な教材や指導法を広く知っていただくために、今後も連携推進グループは、データベース事業に取り組んでまいります。

附属学校実践紹介 附属学校の日常的な実践の中には、素晴らしい取り組みがたくさんあります。

1 言葉で伝える人とつながる

～附属桐が丘特別支援学校 施設併設学級小学部3組「国語」の授業実践～

附属桐が丘特別支援学校には、「本校」と「施設併設学級」という2つの校舎があります。そのうち、施設併設学級の校舎には、隣接する医療型障害児入所施設に入所中の児童生徒が通学しています。

小学部の成田先生は当校の前研究部長を務められ、児童一人一人の力を引き出しながら、児童自身が「言葉」で人とつながる良さを感じられるような国語の授業実践を数多くされています。肢体不自由のある児童の「確かな学び」の力を育てる成田先生の授業についてご紹介します。



「あ、てがみ!」「だれから、きたのかな。」嬉しそうにポストをのぞきこむ児童と傍らで優しく見守る成田先生。
小学部3組の教室前には、段ボールやティッシュボックスで作ったポストがたくさん並んでいます。

竹田 児童達は、だれと手紙をやりとりしているのですか。

成田 主に学校の先生や、入所施設の職員さんですね。みんな、手紙を書いたりもらったりすることをとても楽しみにしています。

竹田 みんなが、積極的に手紙を書くようになったきっかけを教えてください。

成田 国語で毎時間、平仮名の形を正確に捉えて、筆順に沿って書くことに取り組んでいます。例えば『の』という平仮名を書いた後に、繰り返して読んだり、自分で平仮名を書いた後に、得意そうに先生に見せたりするなど、自ら進んで学習に取り組んでいます。そのうちに書いたものを誰かに読んでほしいと、手紙を書くようになりました。学習ではそれぞれの児童に合わせて、握りをつけた鉛筆や平仮名ボード、タブレット等を活用しています。



竹田 文字や言葉に興味が出てきたのですね。

成田 他には、絵本の読み聞かせをもとに、絵の様子や話の筋を自分の言葉で表現しながら紙芝居を作る学習をしています。言葉と絵を結び付けることの面白さや、筋を自分の言葉で捉え直した後に、改めて内容を捉えていくことの楽しさを感じてほしいですね。



授業中、児童はそれぞれ、考えた台詞を短い言葉や表情、身振りで楽しみながら表現しています。

竹田 完成した紙芝居は、どのようにしているのですか。

成田 映像としてまとめています。それぞれの児童は、紙芝居を見てもらいたい人にあてて、『みてね』と手紙を書いています。みんな、豊かな発想力と行動力を持っているので、国語で学んだことを実際の生活に生かしていただきたいと思います。



附属桐が丘特別支援学校 施設併設学級小学部3組担任
成田 美恵子先生

学級の児童と同じ目線で、一人一人に丁寧に語りかける成田先生と、新しい「言葉」を早く知りたくてたまらないというように、真剣な眼差しの児童達。「言葉」を大切に、お互いの思いを伝え合い、人とつながってほしいという先生の願いがまっすぐに伝わってくるような授業でした。授業の様子は、附属桐が丘特別支援学校のホームページ「校長日記」でも紹介しています。ぜひ、御覧ください。

(聞き手：竹田 恵/敬称略)

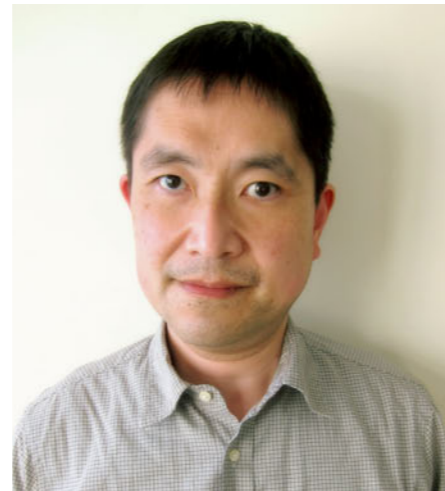
附属学校実践紹介

2 点図から読み取って式を導き出す

～附属視覚特別支援学校中学部の数学の1コマ～

視覚特別支援学校ではどのようにして数学の授業を行っているのでしょうか。

今日は1次関数の授業。視覚障害の生徒がどのように図を読み取り、1次関数の式を導き出すのか。点字使用生徒のクラスの数学の授業を紹介します。



附属視覚特別支援学校中学・高等部数学科
丸山 訓英先生

佐藤 今日の授業のテーマはなんですか。

丸山 今日は1次関数の授業です。座標平面上に示された2点を通る直線の式を導き出すことが目標です。

グラフは、点字プリンターで印刷した「点図」を使います。点図とは、点字と同じ点で描かれた図のことです。座標平面を表す点図は、軸と軸は凸点で、軸以外の方眼は凹点で打ち出されています。そうすることで、触ったときに、座標軸と軸以外のマス目の違いを区別できるようになっています。



佐藤 授業中の生徒の様子に驚きました。みんな積極的ですね。

丸山 生徒に渡した図には、 $(0, 3)$ と $(3, 4)$ の2点に直径5mmのフェルトシールが貼ってありました。まずは点の座標を読み取り、直線の式を各自で考えて点字用紙に書きます。次に、なぜその式が成立するのか、理由を書き始める。生徒が点筆で黙々と点字を打つ音が、教室に響き渡っていましたよね。そしてみんなが答えを導き出したら、全体で共有します。黒板を使わず言葉で説明して共有するのも、視覚障害ならではのですね。

式がわかったら、今度は「 x が6の時、 y は?」「 x が-3の時、 y は?」と、作った式から点の座標を求め、そして各自が持っているフェルトシールを使ってグラフ用紙に点をとっていきます。実際に点をプロットすることで、求めた点と同じ直線上にあることを実感できます。

佐藤 他にはどんな教材がありますか。

丸山 今回は点を表すのにフェルトシールを使いました。他にも関数のグラフを表すときに使う教材として、紐磁石があります。視覚障害の生徒は、放物線のようなグラフを手で描くことが容易ではありません。そこで、ICテープで座標軸を描いたホワイトボードの上に、紐磁石を使ってグラフを形作るので。こうすることで、視覚障害があっても簡単にグラフの概形を作ることができます。また、手元にグラフがあるので、他の人とも共有できるのも利点です。視覚障害当事者の私に、生徒が紐磁石を使って説明できるので、言葉で説明する、言語化することが苦手な生徒にも有効ですね。



佐藤 生徒たちに「数学」とはどのような教科だと伝えていきますか。

丸山 数学は、頭の中に記憶したものを操作して、自分の力で新しい思考を広げられる教科です。ですから頭の中で思考する力があれば、視覚に障害があっても十分に学習できる、面白い教科であるということをよく言っています。生徒たちも日々、前向きに取り組んでいます。

* * * * *

今日、私が見た授業は、単に答えの正誤だけを追求するだけではなく、「なぜこうなるのか」と、生徒自身が推論し、それを皆に伝えている様子が印象的なクラスでした。

(聞き手：佐藤北斗／敬称略)

令和2年度5附属連絡会議 情報交換会「コロナ禍での各校の取組」

会議報告

活動報告



Zoom 会議の様子

5月から始める予定であった令和2年度の5附属会議は、コロナ禍で6月に延期し、Zoom会議で各学校の構成員及びグループの教員の初顔合わせをすることになりました。各学校とも幼児児童生徒たちの安全を守るために、感染症予防、対策に精一杯尽力するものの、いつまで続くか分からない不安や疲れなど、現場は厳しい状況でした。そこで、各学校の現状を共有することで、互いに支え合うことができたり、指導・支援の工夫のアイデアを得る機会となったりすれば、

少しは状況が良くなるのでは、と考へ、7、9月の2回に渡り、コロナ禍での各学校の具体的な取組について情報交換会を行うことにしました。「つなぐ、学び合う、発信する」これが、今年度の5附属会議のテーマです。まずは、コロナ禍での取組を通して、5つの附属学校がつながり、学び合い、そして何らかの形で発信していきたいと思いました。

7月の5附属会議では、各校が作成した資料を基に、現状について報告しました。授業における教材や環境設定の工夫、登下校時の対応、手洗いや消毒の指導、食事の様子など、幼児児童生徒の安全・安心をしっかり守るという方向性は同じで、共通した取組も多くありましたが、障害特性や生活経験に応じた工夫、地域の特徴に応じた取組も明らかになりました。

資料の一部から2つの例を紹介します。9月には、7月の報告をまとめたものを基に、Zoom会議にて、質疑応答、意見交換を行いました。また、5校のうち3校は寄宿舎があります。そこでの感染症予防対策についても共通理解しました。

■幼稚部ソーシャルディスタンス教材（附属大塚）



パタパタディスタンス

ドレミ棒

■コロナ対策（附属久里浜）



登下校の分散（玄関の分散 / バス利用の低減）



手洗いの指導

ランチルームの衝立

「各校での対策が参考になった」、「自校でも生かしていきたい」、「この状況下を前向きにとらえる視点が重要だと感じた」、「この先、対策の見直しも進めているので、このような情報交換ができることは有難い」など次回を期待した意見も出され、良い成果であったと考えています。すべての報告と意見交換の内容は報告書としてまとめ、今後に生かせるようにしたいと思います。

筑波大学社会貢献プロジェクト 「オンライン特別支援教育講座」

当グループは、筑波大学社会貢献・地域連携プロジェクト「特別支援教育におけるオンライン会議システムを活用した指導力向上研修プログラム『オンライン特別支援教育講座』の開発と発信」に採択されました。オンライン会議システムZoomを活用し、国公私立学校の特別支援教育



に携わって5年以内の教職員を対象に、特別支援教育に関するオンライン現職教員研修事業を行っています。全国から、個人コース48名と学校コース11校71名の計119名の参加があり、講師と受講者、及び受講者間の対話型講義・演習を行っています。

令和2年度 現職教員研修プログラム（指導力向上コース）

10月の1か月間、宮崎峻伍先生（長崎県立川棚特別支援学校）の研修が行われました。2週間は、各附属学校の教育等について講義や演習、見学を、2週間は、附属久里浜で実践実習を行いました。幼稚部年中組での実習と振り返りを中心に、校長や小学部主事の講義、さらに、地域の施設等を見学され、子どもたちの将来の生活にイメージをもってもらったのではないかと思います。



これらの研修を通して、現在、高等部所属の宮崎先生は、小さい頃からの社会性の育ちについての考えを深めていられました。この研修の成果を今後の実践に生かし、現場でのさらなるご活躍を期待しております。

editorial Postscript

編 集 後 記

デジタル版となってリニューアルした新しい「SNE-T」、いかがでしたか。4月から準備を進めてきて、多くの方のお力添えをいただきながら、本日、船出となりました。筑波大学附属特別支援学校5校の魅力を、誌面から感じ取っていただければとても嬉しいです。大海原へ漕ぎだしたばかりの新しい「SNE-T」ですが、これからも温かい応援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

(竹田 恵)

誌面のリニューアルを記念して、今号の表紙には連携推進グループの教員および連携推進グループと関わりの深い皆様に登場していただきました。5附属連絡会議委員の先生方、附属特別支援学校5校の校長先生・副校長先生、附属学校教育局の先生、大学の障害科学域の先生方…写真撮影、インタビュー等に快く応じてくださり、本当にありがとうございました。今後、グループの教員がSNE-T取材で、あなたの学校を、あなたのクラスをそしてあなたご自身を訪れるかもしれません。その時はどうぞお力を貸していただけると幸いです。連携推進グループは、筑波の特別支援教育の「今」をたくさんの皆様にお届けできるよう、これからも頑張っています。

(厚谷秀宏)



SNE-T

Group for the Special Needs Education, University of Tsukuba

エスネット9号(通巻 第57号) 2020年12月21日発行
発行 / 編集 : 筑波大学附属学校教育局特別支援教育連携推進グループ
〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1
電話 : 03-3942-6923・6937 FAX : 03-3942-6938
e-mail : snerc@human.tsukuba.ac.jp
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/snerc/>

©2020 筑波大学特別支援教育連携推進グループ(本誌記事の無断転載を禁じます)